

## 災害と破傷風トキソイド（ワクチン） 広報下呂 2018.9

### 災害と破傷風トキソイド（ワクチン）

災害発生時、被災地では様々な疾病の発生が懸念されます。中でも感染症については発生の予防、迅速な治療のために、常に有効な対策を考えておかなければなりません。現場での後片付け時に発生する破傷風やレジオネラ感染症、避難所でのインフルエンザなどの呼吸器感染症や食中毒、消化器感染症などはその代表的なものでしょう。

破傷風は災害時に最も注意しなければならない細菌感染症です。発症すれば致命率はきわめて高く、現在でも30%以上死亡するとされる危険性の高い病気です。人から人に感染する伝染病ではありません。トキソイド（ワクチン）によって予防できる感染症です。

破傷風は、破傷風菌による感染症です。破傷風菌は土の中に常在しています。日常生活で転倒や農作業・園芸などで傷の中に土が入り込むような外傷をうけた場合に感染します。動物や人間の唾液にも菌が混じっていることがあり、咬まれたときに感染する可能性があります。汚染された注射器などの器具からの感染もあります。感染すると感染創の中で破傷風菌が神経毒素を産生し、最悪の場合毒素によって神経が麻痺し呼吸できなくなります。

破傷風を予防するためには破傷風トキソイドの接種が必要です。日本において、任意接種として破傷風トキソイドが使用され始めたのは1953年のことです。1963年にはDPT三種混合ワクチン定期接種が開始されました。しかし、1994年以前に生まれた人は、各種ワクチンの副反応に対する社会的な拒否反応、国の対応などの為にワクチン接種率が低かったこともあってワクチン接種の不完全な人などを中心に破傷風の患者が発生しています。2000年以降では予防接種を受けていなかった50歳以上の発生がほとんどで、年間100例を超える発生が報告されています（国立感染症研究所）。1968年以前に生まれた人の多くは破傷風予防接種を受けていないのです。

現在日本では乳幼児期に三種(四種)混合ワクチン4回と、12歳ごろにDTトキソイド1回の追加接種合計5回の接種を行って予防接種を完成としています。その後は10年に1回は追加接種を受ける必要があるとされています（米国では10年に1回接種しています）。

接種歴のない大人の場合は初回接種（4～8週間隔で2回）と追加接種（初期接種後6～18カ月に1回接種）を行います。定期接種の時期を過ぎているので、就労や渡航などで予防的に受ける時は自費になります。この金額は各病院で決めてよいことになっていますが、おおよそ3000円～5000円くらいの所が多いようです。破傷風のワクチンの予防接種は3回が推奨されているので、全体では9000円～15000円となります。

金山病院ではケガで受診された場合、過去にトキソイドを接種していない場合や3回以上接種していなければ、原則としてトキソイドを一回注射して抗体の産生を促し、ケガの状態に応じて抗体の補充の為に免疫グロブリン製剤の注射も行っています。

現在破傷風抗体の保有率は50歳以上で著しく低くなっています。破傷風トキソイドの効果は約10年で低下します。最終接種から10年以上経た方や抗体価の低い方、接種の既往の無い方で普段土に触れる仕事や、スポーツ、動物に接する方は、破傷風トキソイドの接種を検討されると良いでしょう。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦